

越後支部80周年記念事業山岳古道 牛野尾峠(240m) を歩く



- 日 時 令和5年12月6日(水)
- 参加者 L 遠藤 家之進正和、多田 政雄、渡辺 茂
- 地 図 国土地理院 森町

越後から会津への八十里越への道は長岡、見附、三条から今は廃村になった吉ヶ平に向かいました。その街道に出るには水ノ木峠と牛野尾峠があります。地域の生活道路として利用され、幕末の戊辰戦争の際、会津に撤退する敗残兵や長岡藩関係の人達の悲哀の道となったであろう峠を歩いてきました。



九川集落

五十嵐川に飛来した白鳥を眺め、下田地区森町から長岡、栃尾・巻線県道9号に入り、しばらくすると桃の木トンネルになる。抜けるとすぐに九川の集落である。牛野尾峠への道は丁字路となり、東に向かっている。今回の調査は名前が牛野尾峠となっているが、八十里越への関連した古道調査としたいため、牛野尾集落に車をデポし、漢学の里で集合し、九川集落から歩き出す。



林道分岐

快晴の空が広がる下、九川谷川に沿った田圃の刈り跡が鮮やかに目に入る。しかし、ここでも所々に休耕地がある。しばらくすると林道九川・葎谷線の分岐になる。脇に広がった場所があり駐車が可能となっている。峠へは舗装されている左の林道を進む。見上げれば送電線があり、確認しやすい場所である。



舗装林道終了

田圃が終了し登り坂となりしばらくで舗装も終わり、カヤのヤブとなるが刈り払い跡がある。ここから峠までヤブ漕ぎを覚悟していたありがたい。

道は杉林となりしばらくで分岐に着き、ここまで刈り払いをしたようである。林道は右手に山腹を巻くように稜線に伸びているが、笹に覆われている。



林道分岐

ここから古道の調査となるが、峠道は笹藪となり山腹に沿って左へ入り、小沢の源頭部に植林した杉林の中へと進み、向かいの山腹に着く。

倒木が有り、窪地に沿って進むと笹藪となる。何とか抜けると右手からも窪地がついている所に出る。峠への形状を考えると右手の方が古道となるのか。



杉林脇の道



杉林上部の道



笹藪の道



九川側からの峠



牛野尾峠

作業道なのか論議している暇もなく、笹藪を分けると牛野尾峠に着く。九川集落から1時間足らずである。峠らしく杉の大木が道を挟んで植えられている。牛野尾側は刈り払いがされた道となって、明るい陽射しが差し込んでいる。

朽ち果てた松と杉の傍らに石仏が埋もれている。彫られた仏も大分風化されかかっている。かつては大きな枝を張っていたのだろうが、松くい虫にやられた松が衰れである。

事前調査の際、地元の方は、継之助はこの峠を越したと教えてくれたが、戸板に乗せた継之助を吉ヶ平に近い水ノ木峠か、楽に越せる牛野尾峠を越えたのか論議が尽きない。



石仏



牛野尾側からの峠



279.4m 三角点

峠から早水側の稜線は笹に覆われているが、牛野尾側の稜線は地肌が見え、陽射しを浴びながら雑木林散策が楽しめる。三角点迄行ってみると。梢から雪を抱いた粟ヶ岳が見え、三角点の周囲が刈り払われているようであった。

大休止の後牛野尾側を下る。ここも耕していたのではと沢筋の段階個所を見て論議する。少しの空き地も耕していた当時の労力を思いながら高坂沢を下る。倒木もあるが笹は刈り払われている。



高坂沢脇の道

対岸の雑木林はナラ・クヌギが陽射しを受けて明るい。林床を見ると、里からの笹が侵略しているのが明確に分かる。稜線まですぐ到達するのであろうか。

沢の端から杉林となり、道は山腹を巻き、苔むした石組みとなる。急な下りなので、道の保全のために施したのか。県道183号線に下る道を右に分け、整備された道を下る。



石畳の道

右手に休耕地となった田圃跡を眺め、杉林に入ると、路肩保全のために整備したと思われる石組みが散見される。倒木を潜り抜け、掘り下げられた道を下れば牛野尾集落が見えてくる。



牛野尾への道



杉林の中に石組



牛野尾側道



目倉沢堰堤から粟ヶ岳



集落内の古道 県道183号

目倉沢堰堤前に出れば、眼前に新雪を抱いた粟ヶ岳が迎えてくれる。峠から30分足らずで牛野尾集落に着く。県道183号線に出て、集落内に残る古道跡を確認。事前調査の際、地元の人に教えられたものだ。脇に庚申塔があるが、これらは集落の出入り口に設置されている。道は庚申塔の前を通っているのである。なるほど、県道から見ると塚は裏面なのだ。通る人から拝まれるために、道に面して設置されたのが当たり前ののだが、生活道路が整備された現代は、石碑があるんだという気で見ているだけなのだ。

古道調査の際に、どういう観点で見なければならぬのか改めて認識した山行であった。



庚申塔



冬囲いされた石仏群



石仏群

標高240m、2時間弱で歩ける峠道。牛野尾地区では峠まで刈り払いをして管理しているという。また八十里越えと併せてハイキング等の行事も実施されているとの事。九川側は笹藪となっているが、陽射しを浴びて趣のある山行が楽しめるのではないだろうか。

近くには、奇勝として名高い八木ヶ鼻があり、諸橋轍次博士の漢学の里もあるので、山行の帰りにはぜひ寄っていただきたい。

記 遠藤 家之進正和

